

Title	ホワイトヘッドにおける神論の形成過程
Sub Title	The formative process of Whitehead's view of God
Author	間瀬, 啓允(Mase, Hiromasa)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1986
Jtitle	哲學 No.82 (1986. 5) ,p.1- 24
JaLC DOI	
Abstract	<p>This treatise is the fruit of my sabbatical (from Keio University) in the U.S.A. from July 1983 to March 1985. It consists, of two parts. The first part is an introductory exposition of my academic pilgrimage from Chicago to Claremont, outlining the way in which process theology/philosophy now functions to influence American thought. The second part, being the main part, articulates the formative process of Whitehead's view of God. The primary source works for the study of his philosophical development on the idea of God are Science and the Modern World, Religion in the Making, and Process and Reality. Although they were all published within the period 1925-1929, still there are significant developments in the thoughts expressed, and these have special importance with respect to the idea of God. In this treatise I propose to summarize Whitehead's thought about God as it develops in these three books. The chapters on "Abstraction" and "God" in Science and Modern World constitute his first systematic excursion into what he understood as metaphysics, and in these two chapters can be seen the first explicit indication in his writings that there is a place for "God" in his system. Based on the further development of his philosophical thought about God, he begins to discuss a God of religion. And in this case his chapter on "Religion and Metaphysics" in Religion in the Making has special importance with respect to the doctrine of God. Although Whitehead does not incorporate into his philosophy any doctrines of established religious traditions, he sees in the Galilean origin of Christianity an image through which God's nature is best conceived. The image is "that of tender care that nothing be lost". The last chapter on "God and the World" in Process and Reality is therefore the most significant for the study of his thought about God. In this chapter is found his most thorough consideration of God's interaction with the physical world. He also elaborates on the nature of God, which is dipolar: "God, as well as being primordial, is also consequent. He is the beginning and the end". Thus, based on the thought of Alfred North Whitehead himself, it is possible to formulate a Christian natural theology.</p>
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-0000082-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-0000082-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ホワイトヘッドにおける 神論の形成過程

間 瀬 啓 允\*

## The Formative Process of Whitehead's View of God

*Hiromasa Mase*

This treatise is the fruit of my sabbatical (from Keio University) in the U. S. A. from July 1983 to March 1985.

It consists of two parts. The first part is an introductory exposition of my academic pilgrimage from Chicago to Claremont, outlining the way in which process theology/philosophy now functions to influence American thought. The second part, being the main part, articulates the formative process of Whitehead's view of God.

The primary source works for the study of his philosophical development on the idea of God are *Science and the Modern World*, *Religion in the Making*, and *Process and Reality*. Although they were all published within the period 1925-1929, still there are significant developments in the thoughts expressed, and these have special importance with respect to the idea of God. In this treatise I propose to summarize Whitehead's thought about God as it develops in these three books.

The chapters on "Abstraction" and "God" in *Science and Modern World* constitute his first systematic excursion into what he understood as metaphysics, and in these two chapters can be seen the first explicit indication in his writings that there is a place for "God" in his system.

Based on the further development of his philosophical thought about God, he begins to discuss a God of religion. And in this case his chapter on "Religion and Metaphysics" in *Religion in*

\* 慶應義塾大学文学部教授 (哲学)

*the Making* has special importance with respect to the doctrine of God.

Although Whitehead does not incorporate into his philosophy any doctrines of established religious traditions, he sees in the Galilean origin of Christianity an image through which God's nature is best conceived. The image is "that of tender care that nothing be lost". The last chapter on "God and the World" in *Process and Reality* is therefore the most significant for the study of his thought about God. In this chapter is found his most thorough consideration of God's interaction with the physical world. He also elaborates on the nature of God, which is dipolar: "God, as well as being primordial, is also consequent. He is the beginning and the end".

Thus, based on the thought of Alfred North Whitehead himself, it is possible to formulate a Christian natural theology.

本論考は塾派遣留学からの帰朝報告を兼ね、在外研究（1983. 7-1985. 3）の成果を所収している。第1部は学的巡礼——シカゴからクレアモントへ——、第2部はホワイトヘッドの宗教哲学——神論の形成過程——を論述している。

## 第1部 学的巡礼

### 1.

よく知られたホワイトヘッドの言葉に、「仏教は宗教を生み出す形而上学であるが、キリスト教はつねに形而上学を<sup>(1)</sup>求める宗教である」という言葉がある。仏教が説明的な教理から出発するのに対して、キリスト教は経験的な事象から出発するので、事象からの一般化のために、キリスト教のほうは形而上学的な裏づけを必要とする、という意味である。教理の基礎には、合理的な形而上学が必要となるからである。ホワイトヘッドのこの考えに賛成して、その教理の基礎をホワイトヘッドの形而上学に求めるキリスト教神学の立場を〈プロセス神学〉Process Theology というが、こ

の神学は、実はシカゴに始まったのである。

1920年代のことであるが、シカゴにはホワイトヘッドの哲学思想を受け継いで形成された〈シカゴ学派〉Chicago School が誕生している。神学側の代表的人物はワイマン (Henry Wieman 1884-1975) である。かれはホワイトヘッドの著作『宗教とその形成<sup>(2)</sup>』の出版された翌年 1927 年に、とくにこの著作の講読演習のためにシカゴ大学神学部 (Divinity School) から招聘を受けている。翌 1928 年、同大学哲学部 (Philosophy Department) にハーツホーン (Charles Hartshorne, 1897- ) が着任する。そしてかれが哲学側の代表的人物になる。ハーツホーンはハーヴァード大学でホワイトヘッドの助手をしたことがあり、ホワイトヘッドの有神論の立場をよく理解していた。そこで、この立場を継承しつつ、さらにこれを徹底させて、やがて自分の哲学上の立場を〈新古典的有神論〉neo-classical theism あるいは〈汎在神論〉panentheism<sup>(3)</sup> として表明するようになる。

1943 年から 1955 年 (シカゴを離れる年) まで、ハーツホーンは神学部と哲学部を兼務し、神学と哲学の間の重要な仲介役を果している。とくにこの期間、〈神学部〉Divinity School において、かれの薫陶を受けた若い研究者たちが、後にアメリカの神学・哲学を担う、プロセス神学者・哲学者として大成するようになる。1940 年代、50 年代のことである。

1960 年代以降は、最早シカゴ大学はホワイトヘッド研究の中心ではなくなる。いわゆる〈ホワイトヘッド派〉Whiteheadian たちは、地方に分散し、それぞれ独自の研究グループを形成していく。その中でも最も顕著な現われが、ロサンゼルス近郊にある小さな大学町、クレアモント (Claremont) に誕生した〈プロセス思想研究所〉The Center for Process Studies である。初代の現所長は、シカゴ大学神学部においてハーツホーンの薫陶を受けたジョン・カブ・ジュニア (John Cobb, Jr., 1925- ) である。そしてこのカブのもとで、しかもこの研究所のあるクレアモントで育ったグリフィン (David Griffin) が次代の所長として、現在、実務を担当している。

この「プロセス思想研究所」には、ホワイトヘッドやハーツホーンの残した貴重な一次資料をはじめ、この分野に関する文献が多数保管されているので、ホワイトヘッド＝ハーツホーン＝プロセス（神学/哲学）思想に関わる者であれば、だれでも一度はここを訪れたいと望んでいる。

## 2.

シカゴ大学神学部の重鎮、ギルキー（Langdon Gilkey, 1919- ）の講義を思い出す。その年（1983年秋学期）、かれは〈現代思想と伝統的キリスト教思想の出会い〉The encounter of modern thought with the traditional Christian thought をテーマに掲げ、これを特にふたりの哲学者とふたりの神学者に焦点をあてて、論じようというものであった。デューイ（John Dewey, 1859-1952）とホワイトヘッド（Alfred North Whitehead, 1861-1947）、ティリッヒ（Paul Tillich, 1886-1965）とニーバー（Reinhold Niebuhr, 1892-1971）であった。

ギルキーはかれの著書『旋風を刈り取る』<sup>(4)</sup>のなかで、ふたりの巨人——ティリッヒとニーバーが去った後のアメリカ思想界に吹きまくった旋風——神の死の神学、ヴェトナム反戦運動、黒人神学、東洋宗教への回帰などに代表される旋風——から、どのような良いものを刈り取ることができるかを問い、ここから歴史に対するキリスト教的理解を深めようとしている。この際、かれはさまざまな真理契機を受け入れながらも、とくにティリッヒとニーバーの路線を継承し、さらにホワイトヘッドの哲学思想も取り込んでいる。その著書の最終章は〈プロセスの神、可能性の神、そして希望の神〉The God of Process, of Possibility and of Hope と題されていて、ホワイトヘッドからの思想的影響、とくに神の本性に関するホワイトヘッドの思索からの影響を明瞭なかたちで示している。それは、要約的に述べれば、次の通りである——神は本性上、〈プロセス〉process と関係づけられている。神はプロセスの中であって、世界とその歴史が変化して

いくように、自らをも変えていく。したがって、歴史の未来は神にとって、われわれにとってと同様、〈可能性〉possibility であって、現実性ではない。しかし救済に関しては、神はどこまでも世界にとって〈希望〉hope の根拠なのである。<sup>(5)</sup>

もともとホワイトヘッドにより、形而上学的考察の上から論じ始められた神、いわゆる哲学者の神が、このようにして、事実上、現代アメリカの思想界に影響を残している、と知ることは興味深い。

### 3.

通常、アメリカ哲学を基礎づけた人として5名の哲学者の名前があげられる。ロイス (Josiah Royce, 1855-1916)、ジェームズ (William James, 1842-1910)、ペース (Charles Peirce, 1839-1914)、デューイ (John Dewey, 1859-1952)、そしてホワイトヘッド (Alfred North Whitehead, 1861-1947) である。イデアリストであった最初のロイスを除けば、あとの4名はみなナチュラリストであった。そこでの共通した、基本的な問いは、科学と宗教——とくに科学に生きる人間が、いかにして宗教者でありうるか——という問いであった。この問いに答える過程で、ジェームズはプラグマティズムを展開し、デューイは有神論の可能性を否定して、自然主義者であるためには神の排除が不可欠の要件になると主張した。ところが同じ自然主義の立場であっても、ペースとホワイトヘッドは違っていた。ふたりは有神論の立場を堅持し、科学と宗教の両立可能性を力説した。これらアメリカの自然主義的哲学者たちには進化論の影響が強うかがわれる。かれらは生ける有機体と環境との間の密接な関係・関連性ということを強調して、生ける有機体と環境とは別々のものではなく、それらは一つの交互作用をもつところの、二つのアスペクトにほかならないという主張を繰り返す。環境から切り離されれば、有機体は死滅する。交互作用のもとにあって、はじめて有機体は環境のもとに生育発展することがで

きるからである。<sup>(6)</sup> こうした主張に立って、アメリカ哲学の伝統である自然主義は、〈エコロジカルな問題〉 ecological problems が叫ばれている現況下、目下のアメリカの知的風上においては、すこぶる重要な役割を担わされている。とくに〈環境倫理〉 environmental ethics の形成という重要な課題に向けて、その果たす役割には大きな期待がかけられている。<sup>(7)</sup>

同じことが、現在のアメリカにおけるキリスト教神学についても言える。「自然の神学」(Theology of Nature)、「エコロジーの神学」(Theology of Ecology)、「エコロジーと宗教」(Ecology and Religion)、「エコ・セオロジー」(Eco-theology) 等々の言葉がかなり一般化してきているが、ここにもホワイトヘッド等による自然主義的な哲学思想が著しく影響を与えている。一、二の例をあげれば、ホワイトヘッド派のジョン・カブ(John Cobb, Jr., 1925-) はホワイトヘッドの哲学思想を〈エコロジカルな哲学〉 ecological philosophy として紹介し、あるいは「ホワイトヘッドの思想は徹底的にエコロジカルであった」と見る立場から、自分自身の神学を『エコロジーの神学』<sup>(8)</sup>として構築している。さらに最近では、ホワイトヘッド派の生物学者、バーチ(Charles Birch, 1918-)との共著『生命の解放』<sup>(9)</sup>において、カブはかれとともに〈生命のエコロジカル・モデル〉 an ecological model of Life を提唱し、ホワイトヘッド派によるエコロジカルな自然理解の典型を示している。私見であるが、これからの科学、これからの哲学・倫理においては、その基礎に、自然をみるとき、人間を見るときに必要な「総合性に立った視点」がさらに一層強く要求されるようになるであろうし、また、それゆえにホワイトヘッドの、いわゆる自然主義的な有機体説、つまり生きている大きな自然と人間を含む生命体の相互関連性・相互依存性を認識する哲学説というものが、一層強く要求されるようになるであろう。実はそうしたホワイトヘッドの哲学説をめぐって、シカゴ滞在中の研究は、秘かに目論む私自身の哲学——Eco-philosophy——の形成に時間をかけていたのである。

Eco-philosophy とは、私にとっては、自然に対する人間の責任を主題化した哲学であり、そこでの主要な課題は、人間優位の価値観からみる自然観・人間観の批判的考察と、自然と人間のあいだに成り立ちうる責任倫理の基礎づけである。この研究成果は、部分的に学会講演、学術誌等において既に発表した<sup>(10)</sup>が、なお継続中の研究の一つのテーマである。

シカゴにおけるこの研究は、ホワイトヘッド・プロパーの研究の立場からすれば、いわば周辺的、あるいは応用的なものでしかなかったが、シカゴから、次にクレアモントに移ると、今度は直接的、あるいは中心的に、ホワイトヘッド研究に打ち込むことになった。というのは、その年(1984年秋学期)、恵まれたことに、ジョン・カブが「ホワイトヘッド・セミナー」を担当し、ホワイトヘッドの三著作(『科学と近代世界』、『宗教とその形成』、『過程と実在』)<sup>(11)</sup>を講読演習するという予定がたてられていたからである。セミナー出席者は大学院生10余名と、研究休暇中の訪問研究者3名(私を含めて)であった。出席者には、前以って研究テーマの提出が義務づけられていた。ホワイトヘッドの宗教論、知覚論、文明論、有機体説、現実的実質の理論、抱握の理論等々、出席者の研究テーマはさまざまであった。私自身は研究テーマを「ホワイトヘッドにおける神論の形成過程」と定めた。とくに神論の形成過程を『科学と近代世界』、『宗教とその形成』、『過程の実在』の著作順に調べていくためには、これは絶好の機会であった。というのは、これらの著作がセミナーの講読演習に用いられるという理由だけからでなく、これら三つの著作が「ホワイトヘッドの神論とその形成過程をたどる」という目的のためには、最も重要な一次資料でもあったからである。

## 第1部 注

(1) 『宗教とその形成』(ホワイトヘッド著作集 第7巻 齊藤繁雄訳 松籟社) p. 27.

(2) *Religion in the Making* (1926) が原著の表題であるが、その内容に則して



例えば、『宗教とその形成』となるであろう。宗教成立に関する歴史的（第1講）、神学的（第2講）、人間学的（第3講）、哲学的（第4講）な総合的考察が行なわれているからである。

- (3) *Man's Vision of God* (1941), *The Divine Reality* (1948), *Reality as Social Process* (1953), *A Natural Theology of Our Time* (1967) 等の著作によって、神的本性に関する思想を明確に表現した。そして〈宗教的〉religious, 〈理性的〉rational, 〈伝統尊重〉respectful of tradition の三点の特徴を以って、その思想を〈新古典的有神論〉neo-classical theism と呼んだ。またホワイトヘッドの神論を補強し、神の世界に対する関係において、超越性と内在性、独立性と依存性をともに保持する方法を提示した。これを以って自己の有神論的哲学の立場を〈汎在神論〉panentheism と呼んだ。
- (4) *Reaping the Whirlwind* (1981) は『旧約聖書』のなかのホセア書8章7節のことば。Reinhold Niebuhr と Paul Tillich の二人の巨人が去った後のアメリカ思想界・宗教界は、まさに旋風（つむじ風）に見舞われたようなものだった、ということを示唆している。
- (5) 同書 Part III, Chapter 12, pp. 300-318 を参照。さらにギルキーの論文「現代アメリカ神学の諸潮流」（立教大学キリスト教学会編『キリスト教学』所収、1975年16・17合併号）p. 47 を参照。
- (6) Rebert J. Roth, S. J., *American Religious Philosophy* (Harcourt, Bruce & World, Inc., 1967) pp. 20-24. ここには自然主義の主張が次の5点に要約されている。
1. 自然と人間との連続性。
  2. 自然と人間、物と心、客体と主体といった二分法的な峻別に強く反対する。
  3. 有機体と環境との交互作用。
  4. 個体は絶えず形成のプロセスにあること。
  5. 世界全体が連続的で交互作用のもとにあるとの理解から、共同体意識が強く持たれる。
- (7) 季刊の学術誌 *Environmental Ethics* の発行のほかに、*Ethics of Environmental Concern* (by Robin Attfield, Columbia University Press, 1983), *Ethics and the Environment* (ed. by Donald Scherer and Thomas Attig, Prentice-Hall, 1983), *Environmental Ethics: Choices for Concerned Citizens* (by Science Action Coalition with Albert J. Fritsch, Anchor Books, 1980), *Environmental Philosophy* (ed. by Robert Elliot

- and Arran Gare, Pennsylvania State University Press, 1983), *Cry of the Environment* (ed. by Philip N. Joranson and Ken Butigan, Bear & Company, 1984) 等々の著作が挙げられる。
- (8) *Is It Too Late?: A Theology of Ecology* (Bruce/Beverly Hills, CA., 1970). See esp. Chapter 13, *Whitehead: An Ecological Philosophy*.
- (9) *The Liberation of Life* (『生命の解放』長野 敬・川口啓明共訳, 紀伊国屋書店).
- (10) 「Eco-Philosophy の形成」日本ホワイトヘッド・プロセス学会 第7回大会 京都大学 (1985. 9. 15)——口頭発表. “Ecology and Religion: From Japanese Perspective”, Eco-Theology Conference, Dartington College of Arts, U. K. (1985. 7. 12-14)——口頭発表. ‘Eco-Philosophy as a Liberal Arts Philosophy’, California Lutheran College, U. S. A. (1985. 3. 22)——講演. ‘Eco-Philosophy: From Japanese Perspective’, 慶應義塾大学日吉紀要・人文科学・創刊号 (1986. 3)——論文.
- (11) *Science and the Modern World*, 1925 (ホワイトヘッド著作集 第6巻), *Religion in the Making*, 1926 (著作集 第7巻), *Process and Reality*, 1927-28 (著作集 第11-12巻).

## 第2部 ホワイトヘッドの神論

### 1.

ホワイトヘッド (Alfred North Whitehead) は1861年生まれのイギリス人であって、アメリカ人ではない。最初に20年以上にわたる数理論理学の研究の時代があり、次に物理学の哲学的基礎の研究にたずさわる短い期間が続き、最後に哲学に従事する期間が来る。かれの思想的発展については、ヴィクター・ロー (Victor Lowe) のすぐれた解説があるが、そのなかで、かれは「ホワイトヘッドの著書目録に哲学のタイトルが現われるのは50年代半ばを過ぎてからであり、その生涯の半ば以上の期間を通じて、かれは数学者であって哲学者でないと考えられていた——自らもそう<sup>(1)</sup>考えていた。」と述べている。たしかにホワイトヘッドは、本国のイギリ

スでは数学者として、あるいは論理学者としてよく知られた人であった。<sup>(2)</sup>

1924年(63才の定年の年)に、ハーヴァード大学から招聘があり、快諾して渡米。以来20数年間、すなわち1947年に没するまで、同大学の教授として哲学を講じ、その間に次々と独自の、壮大な思索を発表して、アメリカ哲学史上にゆるぎのない地位を築いた。ハーヴァード大学でホワイトヘッドの助手をしたことのあるハーツホーン(Charles Hartshorne)によると、ホワイトヘッドはずっと以前から自分の心中にあった諸々の思索を発展させるために、常日頃から哲学を講じたいと思っていた、という。したがって、かれの哲学的思索は渡米後に始まったものでないことは論をまたないが、しかし、渡米後4、5年のうちに重要な著作が次々と出版されたことは驚くべきことである。つまり、1924年に渡米すると、翌1925年に『科学と近代世界』、翌1926年に『宗教とその形成』、それから3年後の1929年に主著『過程と実在』を著わしている。さらに『理性の機能』<sup>(3)</sup>、『教育の目的』<sup>(4)</sup>、『観念の冒険』<sup>(5)</sup>、『思考の諸様態』<sup>(6)</sup>等々をあらわしているが、はじめにあげた三つの著作がホワイトヘッドの神論の展開をみる上では最も重要な一次資料であることは、先に述べた通りである。

最初の『科学と近代世界』においては、初めて形而上学的考察の上から神の問題を論じることが明らかにされる。とくに第10章〈抽象〉Abstractionと第11章〈神〉Godの二つの章が重要である。

第二の『宗教とその形成』においては、さきの形而上学的神という主題の展開から、宗教的神が論じ始められるようになる。とくに第3講で扱われる〈宗教と形而上学〉Religion and Metaphysicsの部分が重要である。

そして第三の著作『過程と実在』においては、ホワイトヘッドの形而上学的思索が体系的に述べられ、神の本性をめぐる議論が明確に示されて、かれの神論は確立される。ここでは第5部、第2章、つまり『過程と実在』の最終章〈神と世界〉God and the Worldが最も重要な部分である。

以下において、これら三つの著作を順にとりあげ、その神論の形成過程

をたどることにする。

## 2.

『科学と近代世界』の第10章と第11章は、ホワイトヘッドが形而上学として理解した内容を体系的に扱っている<sup>(7)</sup>。そこでは、アリストテレスがかれの形而上学を完全なものにするために〈不動の動者〉a prime mover——すなわち神——を導入することを必要と考えたことに言及しながら、自分も形而上学的考察の上から神を問題にすることを、初めて明らかにしている<sup>(8)</sup>。これは、現実的世界を理解するためには観念的世界を省みることが必要だとするホワイトヘッドの形而上学的立場から出ており、その手がかりとして、スピノザの〈唯一無限実体〉one infinite substance の考えがとりあげられている。

それぞれの個体的活動力は、課せられた諸条件により一般的活動力が個別化されるところの様態にはほかならない。……一般的活動力は、諸契機や永遠的客体がエンティティであるという意味での、エンティティではない。それはそれぞれの契機によってそれぞれの様態をとりながら、あらゆる契機の基底にある一般的な形而上学的特徴である。これと比較しうるものは何もない。それはスピノザの唯一無限実体である<sup>(9)</sup>。

あらゆるエンティティには、それ自身を現実化させるところの何らかの究極的実体が存するはずであるから、その意味で〈実体〉substance を認めるというスピノザの意見に同意する。しかし、この実体を変化のない、スタティックなものと考えることには反対して、スピノザの実体の理解とは異なることを明らかにするために、ここでまったく新しい用語を導入する。それが“substantial activity”である。この語は、通常、実体的活動性とか、実体的活動力というふうに訳されるが、要するに、事物の根本

にある究極的実在は実体的な活動力、あるいは活動作用にほかならないとする主張である。ここには究極的実在を「もの」ではなく、「こと」として、つまり「物質」ではなく、「事象」としてとらえようとするホワイトヘッドに特徴的な考え方が示されている。

この用語をはじめて導入している箇所では、かれは次のようにいう。「これ (substantial activity) は個々の具体的なものに自己を実現し、もろもろの成立形態をもつ有機体に進化するものにほかならない<sup>(10)</sup>」。ところが、〈形而上学的境位〉 metaphysical situation を構成する諸要因の分析においては、この substantial activity は常に見落とされてしまうものなのである。そこで、われわれの注意を促して、次のようにいう。「この substantial activity は、形而上学的境位を構成する静的要因をどのように分析するさいにも見落されるものである。この形而上学的境位の分析された要素は、substantial activity の属性である<sup>(11)</sup>」。それでは、分析された要素としての substantial activity の属性とは何のことかといえ、それは第一に、可能態としての〈永遠的客体〉 eternal objects であり、第二に、現実態としての〈現実的実質〉 actual entities であり、そして第三に、神と同定される場所の〈具体化、あるいは限定化の原理〉 the principle of concretion, or of limitation である。

ここで注意しなければならないことは、神が substantial activity そのものではなくて、substantial activity の一つの属性といわれている点である。つまり、属性の一つである具体化の原理、あるいは限定化の原理と同定されているのである。これはどういうわけか。神が substantial activity の一つの属性であるというのは……。それはこういう理由からである。出来事、あるいは事象にはかならずプロセスというものがある。このプロセスというものは、価値の条件や特殊化や規準などから成り立つところの、先行する限定をかならず受けて展開している。つまり〈現実契機〉 actual occasion は、その在り方 (how) が特殊でなければならず、また事

実としての何であるか (what) もまた特殊でなければならない。そうでなければ現実契機は存在しえないからである。そこで外見の背後に何らかの実在を求めることになる。こうして見いだされたものが具体化の原理、あるいは限定化の原理なのである。しかし、それでも問題は残る。属性の一つである〈原理〉principle が〈神〉God と同定されるのはどうしてか。その答えはごく簡単に、しかし印象深く与えられている。

……この属性はいかなる理由も与えられない限定を立てる。というのは、いかなる理由もその限定から発するからである。神は究極的な限定力であり、その存在は究極の非合理である。なぜなら、神の本性に基ついて課せられる限定にはいかなる理由も与えられないからである。神は具体的なものではなく、具体的な現実態の根拠なのである。<sup>(12)</sup>

この神は、明らかに宗教的関心の対象としての神でもなければ、またスピノザの神でもない。スピノザの神でないのは、それが〈実体〉substance ではなく、〈属性の一つ〉one attribute だからである。また、宗教的関心の対象としての神でもないのは、それが形而上学的な究極性から性格づけられたものであって、〈善性〉(goodness) からのものではないからである。宗教的对象としての神は〈善性〉goodness によって最もよく特徴づけられるという観点は、ホワイトヘッドに特有のものであるが、これは第 11 章〈神〉God の最終行において初めてあらわれ、これが『宗教とその形成』、さらには『過程と実在』にまでも及ぶ重要な議論として展開されていくのである。

### 3.

次に、『宗教とその形成』に神論の展開をさぐってみよう。

形而上学は宗教上の目的にかなう神をうみ出すわけではないが、しかし、そのための第一歩は踏み出している。そこで、『科学と近代世界』で

は、形而上学は神の知識にいたる第一歩であり、それに対する付加的知識は宗教的経験によって与えられると考えた。ところが、次の段階のこの『宗教とその形成』では、第2講第4節の〈神の探究〉The Quest of Godに見られるように、重要な展開がみられる。すなわち「理性的宗教はその用語を吟味するために、形而上学の助けを必要とするが、しかし同時に、宗教はそれ自身の独立した明証性をもっている<sup>(13)</sup>ので、これを考慮に入れた上で、形而上学は宗教の記述に枠組みを与えてやらねばならない」と述べて、ここにいう〈それ自身の独立した明証性〉its own independent evidence<sup>(14)</sup>を二つ挙げている。第一は〈事物における正しさ〉the rightness of things<sup>(15)</sup>であり、第二は〈完成された理念的調和——すなわち神〉the completed ideal harmony, which is God<sup>(16)</sup>である。つまり、さきに具体化、限定化の原理と同定された神が、ここではその機能する仕方において、具体的なもの、現実的なものとして捉え直されているのである。すなわち、神は〈事物の本性における一つの現実的事実〉an actual fact in the nature of things<sup>(17)</sup>であり、また〈理念的概念的調和の実現〉the realization of the ideal conceptual harmony<sup>(18)</sup>として捉えられているのである。ホワイトヘッドにとっては、存在するものはすべて現実的な〈過程〉processの中に在るということと、〈秩序〉orderが存するから現実的に進化発展する世界が存在するということとは、共に等しく神の本性の特質なのである<sup>(19)</sup>。そこで、かれにとっては、世界の秩序は偶然ではない。秩序をもたずに現実的でありうるような、いかなる現実的なものも存しえないのである。そして、この真理は宗教的洞察によって最もよく把握されるという<sup>(19)</sup>。

ここには神に対する考えの上で、重要な展開がみられる。さきの『科学と近代世界』では、神は具体者ではなく、具体的現実態の根拠であって、それ自体はけっして現実的なものではないと述べられていたのに対して、この『宗教とその形成』では、神は時間的世界の形成要素のうちの一つと

して、「現実的なもの、しかし非時間的なもの」とまで述べられるようになるからである。第3講第3節〈形而上学記述〉A Metaphysical Description のところで、神をも含む「時間的世界の形成要素」を三つあげている。第一は〈創造性〉creativity, 第二は〈永遠的客体〉eternal objects, そして第三は〈非時間的な、現実的実質〉non-temporal actual entity である。そして、この第三の形成要素である「非時間であるが、しかし現実的な実質」が人々の呼ぶ神——つまり、合理化された宗教の最高神である、と注釈されている。<sup>(20)</sup>これは神論における大きな展開である。たとえば、世界全体に秩序を持たせるために「限定化をおこなう」、あるいは「具体化をおこなう」という機能は、〈現実的な実質〉actual entity においてのみはじめて可能である。そこで、この機能を果たすものとしての〈現実的な実質〉actual entity が〈神〉God と同定されたわけである。しかし、このエンティティを神と呼ぶかぎり、それは〈非時間的〉non-temporal でなければならない。というのは、神は「時間的世界を超越したもの」<sup>(21)</sup>のはずだからである。ところが「神の非時間性」ということを強調しすぎると、ただちに困難な問いを引き込むことになる。すなわち、非時間的なエンティティは時間的なエンティティとどのように関わるのか。つまり、「限定化の原理」としての神が世界とどのように関わるのか、という問いである。この問いに答えてホワイトヘッドはいう。

神は世界における結合の要素 (binding element) である。われわれにおいて個別的である意識は、神においては普遍的である。われわれにおいて部分的である愛は、神においては包括的である。神をはなれては世界は存しえない。個別性を調停するものがいなくなるからである。……すべての働きは濃淡の差はあれ、神の刻印を世界に残す。このとき神は理念的諸価値を呈示しつつ、世界に対する新しい関係へと移行していく。<sup>(22)</sup>



ここに言われている「神の世界に対する新しい関係」とは、〈交互作用〉 interaction ということである。つまり、世界に対して神は影響を与えるが、その世界から神もまた影響を与えられるということである。別言すれば、「factual entities の交互作用」という一般原理が神に適用されて、神は〈至高の現実的実質〉 supreme actual entity とされたのである。

そこで、『科学と近代世界』から『宗教とその形成』に至る神論の形成過程には、要約すれば、次のような四点の、重要な考えの移行が見られることになる。

第一に、〈実体的活動性〉 substantial activity は〈創造性〉 creativity と呼び変えられたこと。ここで〈創造性〉 creativity とは、それによって現実的世界が〈新しさ〉 novelty への時間的移行という性格を持たされるころのもの、であるが、それ自体はどのような属性をも持たず、したがって、ここには優先性の問題は何も生じてこない。

第二に、スピノザの思想から継承した一元論的傾向は、actual entities の多元性の強調へと変えられたこと。

第三に、神もまた一つの現実的実質と解されるようになったことから、神の世界に対する関係が一層ポジティブなものとして見られるようになったこと。

第四に、substantial activity とその三つの属性という形而上学的原理が、次の三つの原理に改められたこと。すなわち、〈創造性〉 creativity と、〈永遠的客体〉 eternal objects——それ自体では現実的 (actual) でないが、現実的なすべてのものの中で例示される性質をもつもの——と、そして〈現実的実質〉 actual entities——このなかに神が特殊なケースとして含まれるようになった——の三つである。これら三つの原理については、さらに『過程と実在』において詳しく、且つ体系的に述べられることになる。

『過程と実在』に移るまえに、いま一つ見ておかねばならない課題が取

り残されている。それは、「宗教的対象としての神は〈善性〉 goodness によって最もよく特徴づけられる」という、あの課題である。『宗教とその形成』では、それはどのように論じられているのだろうか。

第4講、第4節〈神の本性〉 The Nature of God のところで、〈神の限定化はその善性である<sup>(23)</sup>〉 The limitation of God is his goodness. とあり、また、〈善による悪の克服〉 the overcoming of evil by good——つまり「悪は結果において善性の回復となる仕方で経験される<sup>(24)</sup>」と述べられている。ここで「悪」とは、過去が消え去り、時間が絶えず滅するということである。そして、これが時間的世界における究極的な悪の所在なのである。そこで、こうした世界を神は救うのである。「救う」とは、「失われたものを神自身の本性のうちに生きている事実へと変えること<sup>(25)</sup>」である。つまり、時間的世界のうちに滅びていくものが、永続的な神の本性のうちに残されていくということ、これが「善による悪の克服」——つまり、神の救済——ということなのである。この主題は、さらに『過程と実在』において、新たに、コスモロジーの問題として展開されていく。

#### 4.

最後に主著『過程と実在』において展開された神論を概観しよう。

『過程と実在』は、その副題に〈コスモロジー試論〉 An Essay in Cosmology と記されている。これは、本書において体系的に述べられている諸概念や諸区分がすべて一つの世界観へと引き寄せられていくことを意味している。われわれの関心事である「神論の形成過程をたどる」という特定目的のためには、第5部、第2章、つまり『過程と実在』の最終章、〈神と世界〉 God and the World が中心部分となるが、しかしその箇所が同時に、コスモロジーに関する最重要部分を成しているのである。ホワイトヘッド自身、〈序文〉 Preface の中で次のように述べている——「第5部はコスモロジーの問題を考察すべき究極的方向についての最終的解釈に関わ

っている。それは〈結局どういうことになるか〉What does it all come to? という問いに対する答えなのである<sup>(26)</sup>。したがって、ホワイトヘッドにおける神論の形成過程をたどることは、同時に、コスモロジーの問題に対するかれの解答をさぐることにもなるのである。

さて、これまでにみた神論は、もっぱら神の〈原初的本性〉the primordial nature of God にあてられてきた。『科学と近代世界』では〈具体化、あるいは限定化の原理〉the principle of concretion, or of limitation としての神であり、『宗教とその形成』では〈新しさの器官、あるいは道具〉instrument of, or organ of novelty としての神であった。このことでは『過程と実在』においても変わらない。神についての考察は、その99パーセントまでが、神の原初的本性についての議論にあてられているからである。ところが、『過程と実在』の最終ページに向けて、神のもう一つの本性、すなわち神の〈結果的本性〉the consequent nature of God に関する議論がみえてくる。最終章、第3節のはじめの部分に、次のような論述がなされている。

神の本性には省略することのできない別の側面がある。……神の世界に対する原初的な働らきの点からみれば、神は具体化の原理であり、そのかぎりでは、神の本性の原初的側面だけが、これまでのところ関連をもっていた。

ところが、神は原初的 (primordial) であると同様、結果的 (consequent) でもある。……神の概念的本性は、その最終的完結性のゆえに変化しないものであるが、神の派生的本性は世界の創造的前進の結果生じるがゆえに、結果的 (consequent) なのである。

こうして、神の本性は両極的 (dipolar) なのである。神は原初的本性と結果的本性をもつのである。<sup>(27)</sup>

ここに新たに明示的に述べられている思想は、〈神の両極性〉dipolarity

of God の思想である。つまり、神は本性上、両極的であるということ、神は世界との関係において本性上、両極的に機能するということである。神の原初的本性は概念的に知られる神の本性であり、これは神の抽象的本質である。これに対して、神の結果的本性は経験的・自然的に知られる神の本性であって、神の具体的現実性である。〈原初的〉primordial として、神は「実在性」(reality) からは程遠いが、〈結果的〉consequent として、神は「勝義の実在性」(eminent reality) であり、「十全に現実的」(fully actual) である、といわれている。<sup>(28)</sup>つまり、神の結果的本性は現実的世界の実現のことであり、それは神の原初的概念に神の十全な感じと意識を織り込むことにより、神が〈十全に現実的〉fully actual であり、〈意識的〉conscious <sup>(29)</sup>であることを示すのである。

ホワイトヘッドは、神の結果的本性が最もよく思い抱かれるイメージとして、二つのものをあげている。〈優しい配慮〉tender care と〈無限の忍耐〉infinite patience である。前者は、救いうるものはすべて救って、何ものをも失うまいとする〈神の配慮〉the care of God であり、後者は、神自身の本性の完成により、中間的世界の動揺を優しく救済する〈神の忍耐〉the patience of God <sup>(30)</sup>である。ホワイトヘッドの有名な成句でいえば、「神は世界を創造しない。神は世界を救うのである。より正確には、神は真・善・美のヴィジョンにより世界を嚮導する優しい配慮をもった世界の詩人なのである」<sup>(31)</sup>。

ここには、結果的本性としての神の〈感応性〉sensitivity ということが含意されており、この含意によって「神は愛である」(God has a love for the world) というキリスト教的言明の意味が回復される。ホワイトヘッドにとっては、神は〈愛の神〉God of love であって、〈恐れ神〉God of fear ではない。したがって、有名な『箴言』のことば、「主を恐れることは知識のはじまりである」(1章7節) は、かれにとってはおかしな言葉である。また、聖パウロの宣教のことば、「主は神を認めない者たちや、

イエスの福音に聞き従わない者たちに報復し、……永遠の滅びにいたる刑罰を受けさせるであろう」(テサロニケ人への第二の手紙, 1章8節)も、人々に恐怖を抱かせるだけのものであるがゆえに、おかしな言葉である。そして、ホワイトヘッドはいう——「もしも現代世界が神を見い出すことがあるとすれば、恐怖を介してではなく愛を通じて、パウロではなくヨハネの助けをかりてでなければならない<sup>(32)</sup>」。ここには、「神はそのひとり子を賜ったなどに、この世を愛してくださった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハネ, 3章16節)と述べて、〈愛の神〉 God of love を証言した福音書のヨハネに対する全面的な賛意が示されている。「何ものをも失うまいとする優しい配慮」は神の本性を最もよく思い抱かせる。そして、ホワイトヘッドはこれをキリスト教のガリラヤ起源に見ているのである。なぜなら、それが強調しているものは、統治するシーザーでも、苛責ない道德家でも、不動の動者でもなく、ただ愛によってのみ静穏のうちに働く優しさの要素だからである<sup>(33)</sup>。

ホワイトヘッドの神論にその基礎を求めるキリスト教神学の立場、すなわち現代アメリカの神学を代表する〈プロセス神学〉 Process Theology は、「神は愛である」という言明の意味を結果的本性における神の感応性において回復する。プロセス神学を代表するカブ (John Cobb, Jr.) は、弟子のグリフィン David Griffin) と共著で出版したプロセス神学の入門書、『プロセス神学の展望』(Process Theology: An Introductory Exposition, 1976) の中で、次のように主張している。

〈感応性〉 sensitivity は、およそ感情をもつかぎりの一切の世界内存在への同情的感情を含む。……これが神自身の情動的状態ともいえるべきものである。神はわれわれの〈受用〉 enjoyment を〈受用する〉 enjoy する。また、われわれの〈苦しみ〉 suffering をともに〈苦しむ〉 suffer する。神の愛、アガペーとはそういうものをいうのである。

(34)  
る。

神の愛、アガペーとは、同情的感応性のこと、つまり同情共苦の感応的愛のことなのである。これをホワイトヘッドの別の有名な成句で表現すれば、〈神は偉大な友である——理解をもって共に苦しむ同僚である〉<sup>(35)</sup> God is the great companion—the fellow-sufferer who understands. 神の〈感応性〉 sensitivity, 神の〈同情共苦性〉 passibility ということ抜きにしては、神の存在はいかなる意味をもなさない。これがプロセス神学者の強い主張なのである。

ここに至って明瞭なことは、はじめに『科学と近代世界』では、形而上学は宗教に役立つ神観をたてないと明言したのに対して、『過程と実在』では、期せずして、それが結果的に役立つものになっている、ということである。

以上に概観した神の両極性の理論、より正確には神の本性における両極性の理論は、要するに、〈原初的〉 primordial として、また〈結果的〉 consequent として、一つの全体としての神が、その本性において二つの側面、二つの極をもつということ、またこの二つの側面、二つの極をもつ神が世界と関わる場合に、「原初的本性」として、また「結果的本性」として機能する、ということである。したがって、世界との関わりを抜きにして神だけを語ることは、あるいは逆に、神との関わりを抜きにして世界だけを語ることは、そのいずれの場合も的はずれということになる。「的はずれ」というわけは、もしも世界との関わりを抜きにして神だけを語るならば、それは神の抽象的本性だけを語ることになって、それだけでは神の具体的現実性を欠いたままの、空しい語らいに終わるからである。また逆に、神との関わりを抜きにして世界だけを語るならば、それは無目的に流動するだけの、ただの喪失の中に在るものだけについての語らいとなって、それだけでは世界は空しく見捨てられたままのものでしかないか

らである。時間的世界の事実は、「過去が消え去り、時間が絶えず滅する」ということである。世界はこの事実からの解放を求めている。生成し、消滅していくものが、永続する神のうちに残されていく。これが世界の解放ということ、神による世界の救済ということなのである。したがって、神を抜きにして世界だけを語ることは、まったく論点を失した、的はずれのことになるのである。

以上が『過程と実在』において展開された神論の粗方であり、合わせてコスモロジーの問題に対するホワイトヘッドの解答である。コスモロジーへの回帰とか、コスモロジーの再興が叫ばれている現状<sup>(36)</sup>下、ホワイトヘッドの神＝プロセスの神は、そうした今日の問題を半世紀も前に先取って与えられた、一つの啓発的な解答であるように思われる。もしも〈プロセスの神〉the God of process がコスモロジーの問題を前にして、余りにも宗教的にすぎるといっているのであれば、そのときにはホワイトヘッドの抱いた形而上学的信念に思いを馳せるべきである。かれにとっては、コスモロジーはあらゆる宗教の基礎であり、およそコスモロジーを示唆するものはすべて宗教を示唆したのであった。<sup>(37)</sup>これがコスモロジーに対するホワイトヘッドの確たる信念だったのである。

## 第 2 部 注

- (1) ヴィクター・ロー『ホワイトヘッドへの招待』(大出 晃・田中見太郎共訳、松籟社)、pp. 107-108.
- (2) ホワイトヘッドの処女作は『普遍代数論』(*A Treatise on Universal Algebra*, 1898)であり、これによってかれは Royal Society の会員に選ばれている(1903年)。『普遍代数論』第2巻は、バートランド・ラッセルとの協同の仕事のために中断され、以後これは完成されることがなかったが、しかしラッセルとの協同の仕事、つまり『プリンキピア・マテマティカ』全3巻(*Principia Mathematica*, I, 1910, II, 1911, III, 1913)の協同執筆による刊行により、その名は一層広く知られるものとなった。ラッセルとホワイトヘッドによるこの協同作業は、数学の基礎概念を展開しようとした集合論的な

壮大な試みであり、これにより現代論理学の実質上の基礎づけが行なわれた。

- (3) *The Function of Reason*, 1929 (著作集 第8巻).
- (4) *The Aims of Education and Other Essays*, 1929 (著作集 第9巻).
- (5) *Adventures of Idea*, 1933 (著作集 第12巻).
- (6) *Modes of Thought*, 1938 (著作集 第13巻).
- (7) 事物の本質を冷静に考察する見地のことを「形而上学的」とよび、この見地に立って、生成する事物の分析に適合する普遍的観念の発見をめざす学問のことを「形而上学」と考えている。『科学と近代世界』(著作集 第6巻) pp. 211-212 を参照せよ。
- (8) 『科学と近代世界』, p. 233.
- (9) 同書, pp. 238-239.
- (10) 同書, p. 149.
- (11) 同書, p. 222. ここでは、形而上学的境位の分析された要素が substantial activity そのものではなく、substantial activity の属性といわれている点に注意せよ。
- (12) 同書, p. 240. ここで神の存在が究極の非合理であるとは、その存在が不可解という意味ではなく、原理自体に対しては究極的な説明は存しない、という意味である。つまり、神の本性は合理性の根拠であるゆえに、その本性に対してはいかなる理由も与えられないのである。
- (13) 『宗教とその形成』(著作集 第7巻), p. 45.
- (14) 同書, p. 37.
- (15) 同書, p. 70.
- (16) 同書, p. 92.
- (17) 同書, p. 92.
- (18) 同書, p. 92.
- (19) 同書, p. 70.
- (20) 同書, pp. 51-52.
- (21) 同書, p. 92.
- (22) 同書, p. 94.
- (23) 同書, p. 90.
- (24) 同書, p. 91.
- (25) 同書, p. 91.
- (26) 『過程と実在(上)』(著作集 第10巻), p. iv.
- (27) 『過程と実在(下)』(著作集 第11巻), pp. 614-615.



(28) 同書, pp. 612, 615.

(29) 原初的としての神は〈感じのための誘因〉 the lure for feeling であり, 〈欲求の永遠的衝動〉 the eternal urge of desire であり, 〈あらゆる可能性のめざす理念〉 the ideal aimed at by all possibilities である。したがって, 神は完全であり, 永遠であり, 変化しないのである。

結果的としての神は〈現実世界との交互作用〉 interaction with the world のもとにあって, 絶えず〈創造的前進〉 the creative advance のなかに引き込まれている。したがって, 神は未完であり, プロセスのものなのである。

以上の意味するところは, 二つの神が存在するというのではない。そうではなくて, 一つの全体としての神の本性にはこうした二つの側面, あるいは二つの極があるということである。

(30) 同書, p. 617.

(31) 同書, p. 617.

(32) 『宗教とその形成』, p. 43.

(33) 『過程と実在(下)』, p. 611.

(34) 『プロセス神学の展望』(延原時行訳 新教出版社), pp. 67-68.

(35) 『過程と実在(下)』, p. 625.

(36) たとえば, 坂本賢三「コスモロジー再興」(新岩波講座『哲学』第5巻所収の論文)あるいは Stephen Toulmin, *The Return to Cosmology: Post-modern Science and the Theology of Nature* (University of California Press, 1982) を参照せよ。

(37) 『過程の実在(下)』 p. 622 および『宗教とその形成』 p. 83 を参照せよ。